

診療所改築時におけるホスピタルアート作成について

～ みんなが集まるもりのおうち ～

○細野治樹（ほその外科小児科 小児科医師）

【はじめに】

当院は愛知県江南市にあり、昭和53年に開設し38年目となる診療所である。今回、平成28年5月から2階、3階部分で小児科診療を開始するにあたり、ホスピタルアートを取り入れた。今回の経緯と導入による効果について報告する。

【依頼までの経緯】

依頼者にとってホスピタルアートは、あいち小児や名市大などで目にする機会があった。前職の江南厚生病院こども医療センターのNICUにも、天使の絵が書かれており、医療者として、ホスピタルアートが比較的身近なものであったと考える。今回、名市大芸術工学部鈴木賢一教授の研究室に依頼するきっかけは、平成27年1月に行われた第28回病弱児研究会での鈴木教授の講演を拝聴したことにある。その時点で診療所の改装準備中であり、講演後に当院にホスピタルアートの作成を依頼したい旨をお伝えした。

【ホスピタルアート作成までの道筋】

平成27年3月、名市大北千種キャンパスに鈴木教授を訪ねた。その際に簡単な自己紹介と地域の診療所の小児科医としての仕事内容や今後の方針を伝え、作成を依頼した。11月に再訪し、学生の方々に面会した。その際、診療所改築時のホスピタルアート作成について、建物としての主な要点を伝えた。1階は従来どおり外科診療の場となっていること。1階エレベーターホールから3階までの階段を、主なアート作成の場所と想定していること。3階に子供が遊ぶことができる空間（のびのびひろば）をつくり、そこの壁面がアートの終点となること。12月に3つのデザインの提案をうけ、診療所のスタッフの意見などを聞き、基本となる図案を決定した。その上で、それぞれのデザインの良いところを取り上げて、ひとつのデザインにまとめた。

【作成の実際】

工事開始から、設計や施工などの関係者が集まるミーティングを月に1-2回行っていた。後半のミーティングにはホスピタルアートを作成した「はみんぐ」の方にも参加して頂いた。顔をあわせて状況の確認をすることにより、関係者との連携がとりやすくなったのではないかと推測する。工事の進行状況が、作成のタイミングとうまくあうかどうか最大の問題点であった。実際に工事の進行は遅れたため、先にアート作成部分の壁面を仕上げるように依頼した。平成28年4月25日から作成を開始し、計4日間で最大6名の方に参加して頂いた。作成した方にとっても記念となり、記憶に残って欲しいとの考えから、壁面の一部は自由にデザインをし、サインを残して頂くように依頼した。最終日には、依頼者やその家族も作成に参加した。階段スペースを1つの大きな木に見立て、1階はオレンジ色を基調にした大地のイメージとした。2階は緑色を基調とし森の木のイメージ、3階は青色を基調とした空のイメージとなった。3階、のびのびひろばの壁面は、空から虹を経て、宇宙へとつながる壮大なホスピタルアートとなった。

【ホスピタルアートの意義】

今回、ホスピタルアートの作成にあたり、診療所の職員も図案の選考や作成の段階から参加することができた。勤務する者にとってアートへの愛着が深まり、ともに小児科診療にあたることへの一体感ができたのではないかと考える。完成したホスピタルアート「みんなが集まるもりのおうち」は当院にとって象徴となるものである。依頼者の小児科診療所として思い、「立ち寄りやすく、こどもや家族が安心して集うことのできる場所でありたい」との考えをホスピタルアートとして表現できたと感じている。当院のホスピタルアート「みんなが集まる森のおうち」が子供達にとって、小児科に対して親しみをもち、診察や治療に対しての

不安や心配を減らすことへつながることはもちろん、地域の皆さんにより愛されるものとなるように、よりよい小児科診療を提供したい。

【謝辞】

今回、ホスピタルアートを作成していただいた、名古屋市立大学芸術工学部鈴木賢一研究室ペイントチーム「はみんぐ」の皆さまに感謝を申し上げます。

「みんなが集まるもりのおうち」

1階 エレベーターホール



1階から2階



2階 エレベーターホール



2階から3階



3階のびのびひろば



写真提供 ネックスビート社 牛田大輔様